

倫理 研究課題 <西洋03>

教科書：p ~ 資料集：p ~ ノート：p ~

●カルヴァンの宗教改革（16c、スイス）

予定説：すべての人の運命は神によって既に決定済みである（←アウグスティヌス）

→人々は大きな不安（自分は救われる運命に予定されているのか否か？）

→カルヴァン「救いの前兆をつかむことは可能」

=各人が職業労働に励み、順調に生活できるならば、それは救いに予定された証拠

=自己の使命と隣人愛に努め、その結果、手元に利益が残り続けるなら、…

=社会的弱者に愛をもたらす世界を実現すべく努力し、その結果…

=「神の栄光」を現す生き方をし、その結果…

=この世を「神の国」に近づけるよう改造（変革）し、

その結果、神から褒美が得られるなら、それは正しい！（営利活動の正当化）

→カルヴァンの教えは商工業者たちに受け入れられ普及した。彼らはピューリタン（イギリス）、ユグノー（フランス）等と呼ばれる教派（プロテスタント教会の一部）を形成し、さらに17世紀以降、市民革命を起こして絶対王政を倒す大勢力に成長していった。

（生きる意味が与えられることによって人間や社会のあり方が一変した典型例）。

プロテスタントの教会は	{	カトリックに比べて簡素・質素（被造物神格化の拒否）。
		聖書中心の姿勢を貫徹（聖書に根拠のない儀式は廃止）。
		自立した人々の水平的つながり（上に立つものではない）。

※参考：M・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』

使命感に基づき公正取引を追求する「資本主義の精神」の由来を解明した名著

カルヴァンによって示された新しい生き方（＝プロテスタンティズムの倫理）

＝情性的消極的でない自覚的積極的な生き方（＝勤勉（禁欲）と儉約（質素）の重視）

→生活全般の合理化（例：帳簿の整理・書類の整頓、娯楽・享楽を避ける真面目な生活）

→資本主義の精神 {

- 利益に結びつく仕事に使命感（責任感）をもって取り組む
- 利己的・投機的ではない、公正で良心的な堅実経営に取り組む
- 注文生産から大量生産（隣人愛の非人格化＝一般化された隣人愛）

★カルヴァンの考え方では、「神の栄光は下から来る」。どういう意味だろう？